

# 政治思想学会会報

JCSPT Newsletter

第1号

1995年1月

## 政治思想学会会報の発刊にあたって

代表理事 有賀 弘

政治思想学会 (Japanese Conference for the Study of Political Thought) は、昨年5月28日に東京都立大学で開催された総会において正式に発足しましたが、今回ここに会報の第1号を発行する運びとなりました。この際ですので、以下に学会の正式発足にいたるまでの経過をふりかえって、与えられた責めをふさぎたいと思います。

すでに多くの方々をご存じのように、政治思想学会の前身をなしたのは政治思想研究会です。近年、日本政治学会が次第に巨大化して研究会の在り方にも変化がみられるようになったこともあって、在京を中心とした政治思想の研究者の間には、かなり以前から、大学ごとの枠をこえた、いわばinter-universityの研究会を開きたいとの意向が強くなっていました。そして、1988年秋のPocock教授を囲む研究会を機として、関西の研究者にも呼びかけて、政治思想研究会世話人会が結成され、具体的な研究会の持ち方の他に、世話人会の方針として、若手の研究者に報告と交流の機会を提供すること、外国の研究者との交流を積極的に進めることなどが決定されました。この決定にもとづき、第一回の政治思想研究会は1989年5月に故藤原保信氏を担当世話人として早稲田大学で開催され、これを出発点として、その後1993年の立命館大学まで5回の研究会を重ね、多くの参加者に支えられて、それなりの成果を収めることができたと思われま

ところで、研究会を重ね、参加者の範囲も拡大するにつれて、政治思想学会を

設立することが望ましいとの意見が次第に有力になってきました。その背景にはいくつかの問題点が考えられますが、いちばん大きかったのは、250人近い参加者を数えて運営のための恒常的な組織が必要になったことだといえましょう。そこで世話人会としては、1993年5月の第五回の研究会に際して、政治思想研究会を基礎にした政治思想学会の設立、および「政治思想学会仮規約」の制定の2点について提案し、研究会参加者の了承をえました。さらに、これにもとづき同年10月3日に世話人会を開催し、世話人全員の参加によって仮に「学会」を発足させ、世話人会は政治思想学会の暫定理事会に移行することを決めました。そして、研究会参加者を中心とした方々に「学会」への入会手続きをお願いした上で、都立大学で「仮規約」にもとづいた総会を開催し、「仮規約」を改正して「政治思想学会規約」を制定することによって、学会は正式に発足したわけです。移行手続きは少しく錯綜したものになりましたが、このことによって、研究会は基本的な性格を変えないままで学会に衣替えできたのではないかと考えています。

振り返って考えてみますと、最初に学会ではなく研究会の発足が計画されたのは、煩瑣な仕事を避けたいとの気持ちもあるにはありましたが、なによりもまず、政治思想の研究者の組織を内に向かって外に向かっても開かれたものにしておきたいとの考え方が、世話人たちの共通了解としてあったことによるものと思われます。若手研究者の重視、国際交流の活発化などの基本方針は、このような考え方の直接的な反映といえるでしょう。内外の関連学会との交流を活発にすることは、政治思想学会の当然の責務といえるでしょうが、研究会の発足当初からとりわけ関係が深かったのは、日本政治学会とアメリカに本拠を置いている Conference for the Study of Political Thought (CSPT) です。研究会および学会への参加よびかけは政治学会の会員名簿を基礎に行なわれましたが、今後の方針としては、まず、両学会で個別に開かれる研究会を有機的に関連させていくことを検討したいと考えています。またCSPTとの間では、これまで細々と続けてきた人的交流をできるだけ活発にする方策を探る所存です。いずれにしろ、「老兵」たちは「立ち去る」前に、政治思想の研究環境の整備のためにできるかぎりの努力は払いたいと考えていますので、よろしく願いいたします。

最後になってしまいました。本学会の藤原保信理事（早稲田大学教授）が去る6月5日に逝去されました。藤原さんは、第一回研究会の担当世話人をされたことから明かなように、政治思想研究会、そして政治思想学会の組織化と活動に、当初からなみなみならぬ熱意を示され、また惜しみない努力を払われてきました。このような藤原さんの政治思想学会への多大の貢献に対して、心からの感謝と哀悼の意を表明させていただきます。

International Society for the Study of European Ideas  
(ISSEI)第4回大会に参加して

半澤 孝麿

上記大会が去る8月22-26日オーストリアのグラーツ市カール・フランツェンス大学で開催された。この学会は文学、哲学、政治学、経済学、歴史学等を横断する多分野総合学会であり、その実質は司会者団から提起される多様なワークショップである。

The European Legacy:Toward New Paradigms を総合テーマとした第4回大会の第二部門(経済、政治、法律)ワークショップから主として政治思想に関係するものを拾うとCivil Society and European Political Theory (Chair: Steven M. DeLue, University of Oxford), Conservative Political Thought; Past and Present (Chair: 東京都立大学, 半澤孝麿), Otherness, Identity and Politics (Chair: Vilho Harle, Helsinki University), On the Concept of Nation, Nationality and Identity in Europe from the 18th to the 20th Centuries (Chair: Edith Hoerandner, Karl-Franzens University), The Political Legacy of Socialism (Chair: David Lovell, University of New South Wales)等があった。ただしワークショップは分野別ではなく個々のテーマ別に設けられているので、上記以外のところに政治思想関係の報告が混在することもその逆もある。それぞれの報告者は数名から十数名であった。次回大会はMemory and History:European Identity at the Milleniumの総合テーマで1996年8月オランダのエトレヒト市で開催の予定。ワークショップのテーマと司会者名および連絡先は、History of European Ideas誌の95年夏頃刊行される号の折込みに発表され、それに従って報告希望者は担当司会者宛に申し込むことになる。なお詳細は都立大学法学部半澤までお尋ね下さい。

1993年・CSPT——イェール大学——に参加して

千葉 眞

一昨年の4月16日から18日まで、ニューヘイヴンのイェール大学で開かれた政治理論のCSPTに出席してきました。私にとっては新しいことばかりで、本や論文を通じて名前と考え方を知っている研究者たちと直接会って話しをしたり、また壇上にその姿を見たりで、興奮を覚えた3日間でした。コンフェ

レンスの出席者は常時130-40名位であったかと思いますが、テーマは、“Democracy and Difference: Changing Boundaries of the Political” というものでした。

今回のコンフェレンスの大きなイベントは二つありました。第一は最初の日の冒頭を飾る「デモクラシーの現在」というパネルで招待された Habermas、アメリカの代表的な政治理論家 Sheldon S. Wolin、今日のフェミニズム政治理論の代表格の一人 Jane Mansbridge が講演者として、また Joshua Cohen と T. A. McCarthy という中堅どころの著名な研究者がコメンテーターとして登壇しました。

Habermas の英語は聞き取りにくかったのですが、デモクラシーを支えるための客観的手続きと制度的枠組みの合理性の問題を取り上げ、デモクラシーを成立させる公的領域の制度的条件に力点を置くハーバーマスらしい講演でした。Mansbridge は、差異と権力の関係の問題を直接とり上げ、強制力の行使が不可避的に付随することによって変わりのないデモクラシーの権力行使の曖昧性を、これまでのデモクラシー論がなしてきた以上に、凝視していく必要を唱えました。Wolin は、現代政治におけるデモクラシーの「一時しのぎ」(fugitive) でしかない窮境を理論づけながら、現代アメリカの国家と政治と立憲主義の枠組みが本来のデモクラシーを構造的に排除していく点を具体的に論じました。興味深かったのは、同様のラディカル・デモクラシー論を追求しているように見える Habermas と Wolin の立場の明白な相違が、フロアで聴いているとはっきりと浮かび上がってきたことです。Habermas のデモクラシーの制度的枠組みへの関心と Wolin の デモクラシーの精神性ないし実存へのコミットメントとの間に両者のコントラストがよく出ているように思いました。

第二の圧巻は、これも初日の「デモクラシーと哲学」というテーマのパネルで、これまた錚々たる理論家たち、Richard Rorty, Benjamin Barber, Richard Bernstein, Amy Gutmann, Robert Dahl によって、はたしてデモクラシーは哲学的基礎を必要とするのかということが議論されました。印象深かったのは、彼らの立場の相違を越えて、ポストモダニズムの議論の衝撃がことのほか大きいということでした。

結論的には「デモクラシーは “a philosophical justification” は必要とするが、必ずしも “a philosophical foundation” を必要としない」という Amy Gutmann の言葉が、パネル全体の方向性を表わすものでした。こうした今日のアメリカの代表的政治理論家たちにおけるデモクラシーの哲学的基礎の探求の断念とでもいえる事態を、どのように評価したらよいでしょうか。

コンフェレンス全体に関して極めて印象深かったのは、これらの政治理論家たちが相互に相互の仕事を注意深く読みあっているということでした。そして自由にあまり気負うことなく議論し論争する習慣にはいつもながら感心させられました。外国人の参加者という視点から印象深く感じたことは、CSPTに

は、カナダはもちろんのこと、イギリス、フランス、ドイツと西洋諸国からのスピーカーが何人か招かれていて積極的に参加していたことです。例えばイギリスの Anne Phillips や フランスの Chantal Mouffe は、刺激的なペーパーを読んでおりました。今回、日本からのペーパーを読む参加者が皆無だったことは残念です。一つは言語の障壁の問題があるわけですが、英語でもっともっと発表していくことの必要性を痛感した次第です。

## 藤原保信会員を悼む

飯島 昇蔵

藤原保信氏（早稲田大学政治経済学部教授）は1994年6月5日敗血症のため永眠された。

生前、氏は、政治思想学会の前身、政治思想研究会の創設時からの世話人の一人として尽力された。享年58歳。慎んで哀悼の意を表します。

T.H.グリーンやE.バーカーらのイギリス理想主義の研究から出発された氏は学位論文「近代政治哲学の形成—ホッブズの政治哲学—」（早稲田大学出版部1974年）において、ホッブズ哲学のなかに、近代市民社会を基礎づける諸原理（近代的思惟と価値観および政治哲学）の成立を読み取りつつ、そこに潜む問題点を深く感じ取られた。そして、近代政治社会の展開と矛盾を洞察しそれを克服しようとしたヘーゲルを、ご自身の次なる学問的対象とされ、その研究は「ヘーゲル政治哲学講義—人倫の再興—」（御茶ノ水書房1982年）として結実した。近年は「歴史における現代」というテーマを研究関心とされ、環境倫理学から、リベラルとコミュニタリアンの論争に至るまで、幅広い対象について哲学的に考察しておられた。その成果の一端、『自由主義の再検討』（岩波新書1993年）が最後の著作となった。

また、教育者として氏は、特に若い研究者の育成に情熱を注がれた。多くの編著は彼らに発表の場を提供すべく著された。さらに、彼らの相互研鑽の場としての研究会や学会を意欲的に組織された。本学会の設立への参画もまた、そのような氏の意志の現われであろう。

若くして多くの研究書を公にしていたとはいえ、ご自身の政治哲学の体系的構築の途上にあつた突然の死は、単に政治思想学会のみならず日本の社会科学一般にとっての大きな損失であるにちがいない。

政治思想学会理事名簿

(1994年5月28日政治思想学会第1回総会において承認)

有賀弘(代表理事)、飯島昇蔵(監事)、飯田泰三、小笠原弘親、小野紀明、  
小山勉、加藤節(事務局長)、佐々木毅、佐々木武、佐藤慎一、鷺見誠一、  
関口正司、田中治男、千葉真、中谷猛、半澤孝磨、平石直昭、†藤原保信、  
松本礼二、宮村治雄、吉岡知哉(監事)、渡辺浩 [50音順]

政治思想学会1994年度会計中間報告

(1994年9月9日現在)

収入	金額(円)	支出	金額(円)
前年度繰越金*	402,569	通信費	,749
会費**	635,000	印刷費	,754
利子	935	消耗品費	,475
		謝金	189,500
計	1038,504	計	344,478

収入-支出=694,026円

\*前年度繰越金とは、昨年小笠原弘親氏(政治思想研究会世話人)より送金された280,009円と佐々木毅氏(同世話人)の振替口座残高122,560円との合計金額。

\*\*会費とは、1994年8月17日までに納入通知のあった1994年度政治思想学会会費の合計金額(274名中226名)。

なお、本報告は1994年10月2日理事会において確認された。

会員の異動